

「ミズベリング瑞梅寺川会議～山から海までのつながりを探訪する～」の企画と実践

九州大学大学院工学府 学生会員 穴井貴也、滝澤恭平
九州大学大学院工学研究院環境社会部門 正会員 清野聡子

1. 背景と目的

福岡市西部に位置する瑞梅寺川は、その源を脊振山地の井原山に発し、川原・赤崎・汐井川の支流を合わせ北流し、今津湾に注ぐ2級河川である。また流路延長は13.2km、流域面積52.6km²の自然と歴史に恵まれた河川である。上流部には瑞梅寺ダム、中流部はなだらかなスロープ地形で農耕地が広がりついている。歴史的には、「魏志倭人伝」に伊都国と古代からの記録が残っている。そして河口の今津干潟は、希少種のカブトガニの産卵地や生育地、クロツラヘラサギの越冬地である。一見すると自然豊かな瑞梅寺川流域であるが、様々な課題も抱えている。その解決のために、流域の関係者が現地をみながら対話する場の必要性が言われていた。



「ミズベリング・プロジェクト」とは、かつての賑わいを失ってしまった日本の水辺の新しい活用の可能性を創造していくプロジェクトで、水辺に興味を持つ市民や企業、そして行政が三位一体となることで実施されている。また、ミズベリングとは、「水辺+RING(輪)」、「水辺+R(リノベーション)+ING(進行形)」

の造語であり、このプロジェクトによって、水辺とまちが一体となった美しい景観と新しい賑わいが各地で生み出されている。

そこで自然と歴史が豊かな瑞梅寺川流域のあり方を考える方法として「ミズベリング瑞梅寺川会議」第1回を企画、実施した。目的は「瑞梅寺川流域の山から海までの自然や歴史を探訪し、そのつながりと抱えている問題について再発見する。また、我々の身近にある瑞梅寺川流域や今津干潟の今後の行く末についてディスカッションを行う」とした。



写真 1, 瑞梅寺川流域

2. 実施内容

2015年11月22日、23日の2日間にわたり、現地見学、ミニ講義、ワークショップを行った。当日の行程については表1に示す。実施内容としては、瑞梅寺川流域の山から海まで、自然と歴史のつながりと抱えている問題を再発見するという目的で、瑞梅寺ダムと瑞梅寺川流域、そして河口の今津干潟にバスで訪問した。

それから各現地について、パネルを用いて説明を行った。1日目に小池裕子博士（九州大学名誉教授）にはクロツラヘラサギの繁殖地や越冬地等のその生態について解説頂いた。今津干潟に越冬にやってくる本種の個体数は昔に比べ増え、近年は安定しているとの報告を頂いた。2日目に竹村公太郎（NPO水フォーラム代表理事）に河川流域の歴史的変遷や水循環基本計画についてランチセミナーで講演頂いた。行程の最後に、今回の訪問の感想を参加者に尋ね、今後、瑞梅寺川流域や今津干潟でやってみたいことについてディスカッションを実施した。

瑞梅寺ダムは、重力式コンクリートで1977年に竣工し、多目的で洪水調整と利水容量は上水道・不特定用

11月22日(日)		11月23日(月)	
10:00～	九州大学系キャンパス CE40号棟2階会議室で レク、情報共有	10:00～	九州大学系キャンパス CE40号棟2階会議室で レク、情報共有
11:30～	キャンパス内の瑞梅寺川 流域エリア他見学	11:10～	瑞梅寺ダム見学
13:00～	今津干潟見学	13:30～	今津干潟見学
14:30～	瑞梅寺川流域見学	15:30～	ディスカッション (今津公民館)
15:30～	瑞梅寺ダム見学		
16:40～	まとめ		

表 1, 行程表

水として用いられており、小規模ではあるがその役割を果たしてきた。しかしその反面、水だけでなく普通なら河川・海に流れるはずの土砂も堰き止め、ダムに堆積しているというのが事実である。またその堆砂速度は予想よりも早く、その対策としてダム上流に2つの貯砂ダムを設けている。貯砂ダムを設けた結果、瑞梅寺ダムへの土砂堆積速度は小さくなったが、ダム下流に土砂が供給されないという問題は改善されていない。そこで今後の課題として、ダムの土砂が下流へ供給されるための総合土砂管理が挙げられている。

瑞梅寺川については、今回事前に瑞梅寺川で活動している「瑞梅寺川を守る会」会長の三苦誠様にヒヤリングを行った。この瑞梅寺川を守る会は、先人が築いてきた瑞梅寺川を引き継ぎ、昔の自然を取り戻し、共生できる街づくりをしたいという思いから、瑞梅寺川の清掃活動と彼岸花植栽による環境美化活動を50年間行っている。また、昔の瑞梅寺川は水流量が多く、サケ・ウナギ・アユ、その他数多くの生き物が生息していたが、瑞梅寺ダム建設や土地開発による生活排水が流されるようになってから、昔のような自然豊かな川ではなくなったとのことである。

今津干潟は、瑞梅寺河口部に位置し、今津干潟北東部の砂浜はカブトガニの産卵地である。また、冬には多くの野鳥の越冬地となっており、その中には絶滅危惧種に指定されているクロツラヘラサギもいる。昔はアマモも生えており、干潟にはハゼやシャコなど多様な生物が生息していた。しかし、1977年に瑞梅寺ダムの建設により、干潟に流入する水や土砂の量が減少することで、砂浜は後退し泥干潟化した。カブトガニについては、1988年の道路拡幅工事も重なり、その産卵数は激減した。他にも、泥干潟化や生活排水等の影響によりカキ礁が形成されるようになった。このような状況下で今津では様々な活動が行われてきた。カブトガニ幼生の生息場づくりのためにカキ殻の回収し、そのカキ殻の肥料化、コアマモ場づくり、鳥類の休息場づくり等の活動に積極的に取り組んできた。



写真2, 今津被干潟カキ礁見学

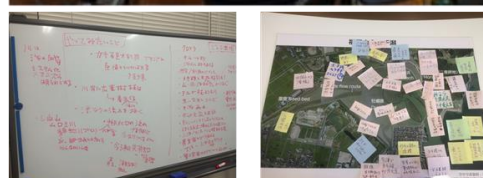


写真3, ディスカッションの様子

ディスカッションで話し合った内容について、まず第1に、瑞梅寺ダムは水だけでなく土砂も堰き止めているという事実である。これは瑞梅寺川流域や干潟の生態系に影響しており、山・川・海へ砂をつなぐ必要があるということである。このように河川流域は山から海まで繋がっているため、今後瑞梅寺川流域で何か実施する際は様々な立場の人たちとの連携が大切である。そうであれば、現在のような管理者の縦割り社会での話し合いや、上流の農業者と下流の漁業者がどのようにしてやり取りをするかも課題である。

これらを背景に、次のことを瑞梅寺川流域や今津干潟で今後やってみようという案が出された。先ず、川は海の血管であり、大学による河川流域のメカニズム・システムを明らかにするということがある。また瑞梅寺川流域では、海に栄養分が来るように河岸に広葉樹林を植えること、昔のようにサケやアユなどたくさんの生き物が

いる川にしたいという案がでた。今津干潟に関しては、カキ礁をブランド化し、今津でカキ小屋を行い、それで出たまたは間引きによるカキ殻を有効利用し、カキの肥料化・カキ殻でできた島作りたいという案がでた。他にも、アマモ場づくり、生物と人が共生できる里海づくり、せっかくヨットハーバーがあるのだから、そこでサップやカヤックなどのマリンスポーツができるようにしたいといった様々な案がでた。

今回、ミズベリングのような活動を瑞梅寺川で行うのは初めての試みであるが、今後、瑞梅寺川流域で事を成す際は縦割りではなく、様々な立場の方々の連携が大事である。